

# 3・11 後 を生きる

「たびむすび」で実施してきた被災地を訪問するツアーは「地域に学ぶ」をテーマにしてきました。被災地で復興に向かう皆さんの話を聞き、地域を見て感じ、知識と感動を得るツアーです。しかし、被災地の状況は刻々と変化しており、それに伴ってツアーのあり方も変化してきていま

## 東北復興日記

160



津波被害を伝える施設として、今年8月のツアーでは東日本大震災で児童ら90人の命が助かった宮城県山元町の中浜小学校を訪ねた

ゆいネット／たびむすび  
代表取締役  
稲葉雅子さん



## 被災地訪問 二つの考え方

す。被災地の変化を皆さんにも見守り続けてほしい。その思いを持ってツアーを企画する場合、二つの考え方があると感じています。

一つは「変わらないものを見続ける」こと。チェルノブイリやグラウンド・ゼロなど、災害や事件事故で大きな悲しみをもたらした場所を、旅という手法で訪れることにより「忘れない」という考え方があります。東北でも今回の震災を千年先まで語り継ぎたい。そのために「巡礼するように訪れるべき被災地」をどこにするか、調査選定している人たちがいます。

もう一つは「被災地域の課題解決に参加すること。震災直後には、瓦礫撤去などの作業を多くの方がボランティアとして支援してくれました。何かしら役に立ちたい、できることをしたいという気持ちの表れでした。震災から四年半が経過し、地域の状況は変化。「新たに商品をつくりたい」「地域産品を販売するイベントをしたい」「地域の行事を盛り上げたい」など、被災地で新しい取り組みを始める人たちがも出てきたため、地域の課題が多様化してきました。その地域の課題を一緒に解決するために旅をし

ようつという考え方は、宮城県南三陸町で藍を育て始めた若い女性がいます。藍染め商品の販売はまだ先になりそうですが、藍を育てたり、女性ならではの視点で藍染め商品を企画したり、販売方法を一緒に考えたりするツアーを実施していきたいと考えています。今は「支援」というよりも「協同」の時期。被災地を訪れて、一緒に何かを創りあげていくという「学びと実践」ができる旅づくりを進めていきます。

この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。